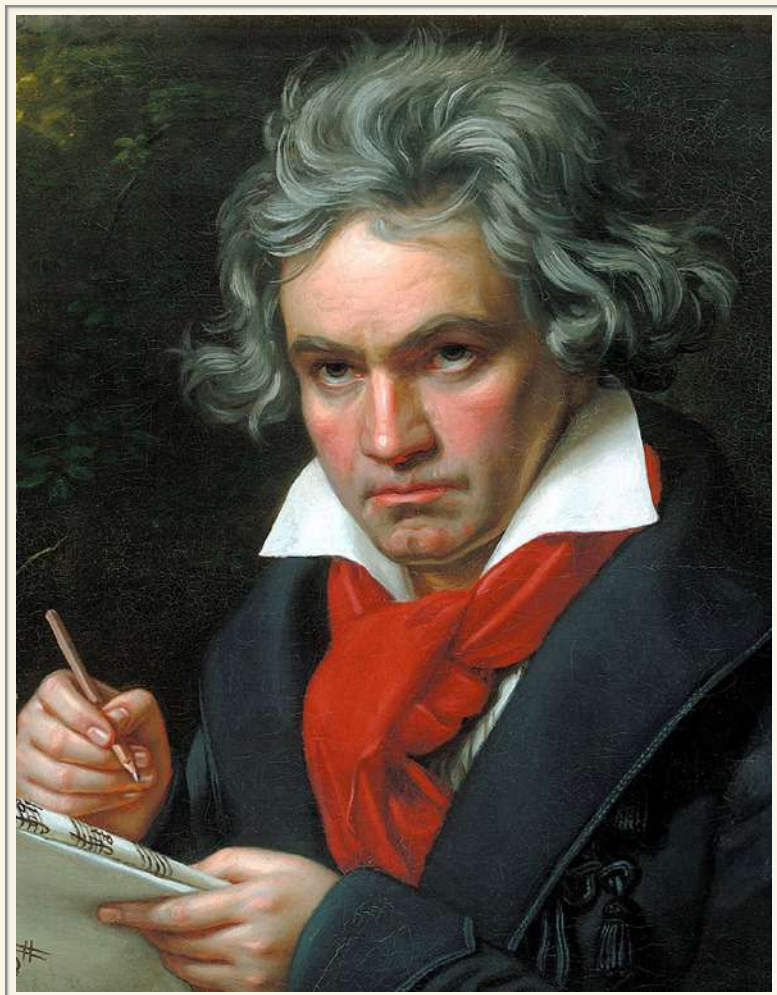


# ベートーヴェン

---

松尾 治樹



株式会社 松尾楽器商会

ウィーンでの、ベートーヴェンの初期の人生はバラ色だった。ピアニストとして大成功し、彼の作品も世間の注目を集めていた。ウィーン中の名士がベートーヴェンの弟子であることを自慢にし、経済的にも裕福になっていた。



ベートーヴェンは当時最高のピアニストで、特に即興演奏においては最強とまで言われていた。

当時のウィーンにはヨハン・ネポムク・フンメル、ヨーゼフ・ゲリネック、ヨーゼフ・ヴェルフル、ダニエル・シュタイベルト、イグナツ・モシュレスら多くの有能なピアニストが住んでいたか、或いはウィーンを活動の拠点としていた。これらのピアニストのすべてとベートーヴェンは果たし合いをしたが、彼に勝てる者は誰もいなかった。



ベートーヴェンの弟子であるカール・ツェルニーは自伝の中で、父親の友人で、大作曲家でピアニストのヨゼフ・ゲリネック(1758年ー1825年)が、「今晚、自分はある

夜会に招かれているのだが、そこで名も知れないピアニストと「果たし合い」をやらされる事になっている。」と話していた時の事を回想している。彼は「勿論、あっさり片付けてやるさ！」と付け加えたのだが、翌日になってその首尾を尋ねると、ゲリネックはまったく悄然とした様子で、「昨日のことは忘れることが出来ない。あいつには悪魔が取り憑いている。未だ嘗て自分はある演奏を聞いた事がなかった。私の与えたテーマで即興演奏をしたのだが、ある演奏はモーツァルトのでさえ聴いた事がなかった。その後には自作の曲を演奏したのだが、これがまた凄かった。雄大で想いも付かない高度なテクニックで効果的に弾いて見せたのだ。」彼は惨敗を認めざるを得なかった。その相手こそ若きベートーヴェンであった。

「作曲のお蔭で随分実入りが良くなった。注文に応じ切れない程だし、おまけにこちらが望めば、ひとつの作品に対して6~7人或いはもっとそれ以上の出版元を宛てに出来る程だ。しかも向こうから条件を提示して来るのではなく、こちらの言い値で払らってくれる。」

しかし、その時既に恐ろしいことが起こりつつあった。ベートーヴェンの聴覚が失われ掛けていたのだ。

「昼夜を別たず絶えず耳鳴りがする。自分が聾になったなど、人には絶対言えないから惨めな生活を送っている…。私の聾がどの程度かは、劇場で役者の台詞を理解しようと思ったら、オーケストラの処まで行かないと駄目なのだ。それ位だと言えれば解ってもらえるだろうか。一寸でも遠く離れると、楽器の音や歌手の高い声が聴こえない。それ以上に離れるともう全く聴こえない。小さな声で話されると何を言っているのかさっぱり解らない。だからと言って大きな声で叫ばれると我慢がならない。」

ベートーヴェンは親友のフランツ・ヴェーゲラー(1765-1848)にその窮状を訴えた。

聴力が退化するのを防げることなら、ベートーヴェンは電気療法やいかがわしい治療まで何でも試した。それは血の出る程の苦しみだった。

ハイリゲンシュタットの遺書



「君たちは、私が意地悪で、頑固で、人間嫌いだと思っているし、そう言ってもいるが、それは大きな誤解だ。私がそう見えるとしても、その隠された本当の理由を君たちは知らない...。

どの感覚よりも完全でなければならぬこの感覚、かつては私が最高度の「完全さ」で備えていた、同業者の中でさえその「完全さ」において私に匹敵する者などほとんど居なかったこの感覚が、病に罹ったなどどうして認める事が出来ようか...。」

1802年、自分の死後に読むようにと弟達に宛てて書かれた手紙、有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」は心からの叫びだった。

その後も彼は拠点としていたウィーンで相変わらずの有名人であり、しかも、それまで最も偉大な作曲家として最高とされて来た作曲家兼ピアニストのヨハン・ネポムク・フンメルよりも偉大だと認められていた。またウィーンの民衆からは「偉大なる奇人」と親しまれていた。彼の名声は世界的で、ヨーロッパ全土は勿論、英国からも彼を訪れる人は絶えなかった。彼は訪問してくる人すべてと会い、あらゆる問題に付いて独断的な意見を述べた。そんな彼の姿はウィーンの酒場やカフェで毎日の様に目撃されていた。

英国で、1846年6月から1852年2月までと1865年10月から66年6月までの2度、首相を務めたジョン・ラッセル卿もその一人だった。彼は最晩年の老いたベートーヴェンと会い、その演奏に接しているが、その時の様子を以下の様に記している。



「ピアノの前に座るや否や、彼にはもう、傍らに誰か人が居るなどの意識はまったく無くなってしまったかに観えた。顔の筋肉は引き攣り、血管は浮き出していた。狂気に満ちた眼は一層吊り上がり、唇はわなわなと震えていた。ベートーヴェンは、まるで自らが呼び寄せた悪魔に反対に操られてしまっている魔法使いの様だった。ほとんど耳の聴こえない彼には、自分が弾いている音を完全に聴き取ることは不可能だった。だから、彼が弱く弾いた時など唯の一音も音は鳴っていなかった。彼は「こころの耳」で聴いていた。彼の眼と、彼の指先のほんの僅かに変化して行く仕草で、頭の中の一節が次第に小さくなって、段々に消えて行くのが解った。楽器は演奏者が聾であるのと同様に押し黙ったままだった...。」

遺書を書いたものの自殺することは思い留まったベートーヴェンのその後の生き様は悲愴で壮絶なものだった。

ベートーヴェンは聾になってもピアノを弾くことを止めなかったし、自分の作品の演奏には練習に立ち合い、オーケストラ曲の初演では自ら指揮をするといい張った。

耳が聴こえないうえに指揮振りも目茶苦茶だったので、オーケストラは混乱し、しばしば支離

滅裂な状態に陥ったりもしたが、やがて

楽員はベートーヴェンを見ずに、第一バイオリンの弓の動きを注視する術を学んだ。ベートーヴェンは超一級の音楽家だったので、聴覚の代わりに視覚を活用することができた。

弦楽四重奏団のリーダー、ヨゼフ・ベームは、1825年、作曲者立ち会いの許に「弦楽四重奏曲変ホ長調」作品127のリハーサルをやった時の様子を次の様に書き遺している。



メトロノームの製作者として知られるメルツェルがベートーヴェンの為に製作した補聴器の一つ



ベートーヴェンの「目」が監視する中で、我々は根気よく何度もリハーサルを重ねた。敢えてベートーヴェンの「目」と強調しているのは、この哀れな作曲家が完全な聾で、自身が作曲したこの世のものとは思えないこの美しい曲を、もはや自身では聴けないのだと想うからなのだが、とは言え、彼の目の前でリハーサルをするのは尋常なことではなかった。彼の「目」は弓の動きを注意深く追い、それに依って、テンポやリズムのどんな些細な誤りも見付け出し、直ちに矯正する事が出来た。」

ベートーヴェンの父親は飲んだくれの宮廷楽師だったけれど、幼いルードヴィッヒに音楽の才能を認め、我が子を第二の「アマデウス・モーツァルト」に仕立て上げ、自らは将来、楽隠居する積もりだった。それで幼いルードヴィッヒには、朝起きてから夜寝るまで毎日厳しい辛い訓練を課した。そのお陰でベートーヴェンは絶対音感を身に付けることができたし、そればかりか第一級の音楽家に成る事も出来た。しかも完全に聾になってからも、「こころの耳」ですべてを聴く事が出来たのだ。